平城宮跡造酒司出土木簡（重要文化財）

前号（奈文研ニュースNo.58）でもお伝えしたとおり、およそ50年前に平城宮跡造酒司（ぞうしゅし）から出土した木簡568点が、本年9月に一括して国の重要文化財に指定されました。造酒司とは、平城宮の北東部に位置する、酒や酢をつくる役所です。木簡の重要文化財指定を記念して、10月17日から11月29日まで、平城宮跡資料館にて秋期特別展「地下の正倉院展　造酒司木簡の世界」を開催しました。特別展では、568点の中から選りすぐった75点のほか、酒器として使われたとみられる土器や、造酒司から出土したさまざまな瓦、木製の祭祀具など、現在までにおこなわれた5回にわたる造酒司の発掘調査成果も公開し、たくさんの皆様に足をお運びいただきました。

今回は、この特別展のメインとなった、重要文化財の木簡のいくつかをご紹介します。

（企画調整部　中村 玲／都城発掘調査部　桑田 訓也）

（表）　（裏）

造酒司からの呼び出し状　発掘調査地が造酒司であることを決定付けた木簡の一つ。造酒司が、「長」という役職の者三名を呼び出す内容です。この木簡が差し出し側の造酒司で見つかったのは、呼び出された「長」が現地へ出向く際に持参したからだと考えられます。

長さ（一五〇）㎜・幅三八㎜・厚さ三㎜

（表）　（裏）

「臭酢」等と記した木簡　「臭キ酢、鼠入リテ在リ（入リタリ）。」酢の甕（かめ）に鼠が落ちているのを発見した人が、悪臭に思わず鼻をつまんでいる様子が目に見えるようです。裏面は、「臭」の習書。

長さ（一〇六）㎜・幅二二㎜・厚さ四㎜

※写真は、すべて実寸大です。
　欠損があるものは、長さ・幅に（　）を付けています。

水汲みの割り当て表　十一月十六日の水汲み担当者八名の氏名が書き上げられています。水は、醸造用として造酒司内の井戸から汲んだものと思われます。年紀は書かれていませんが、日付からみて、神亀元年（七二四）十一月におこなわれた、聖武天皇の大嘗祭（だいじょうさい）に関わるものである可能性があります。

長さ二五六㎜・幅二六㎜・厚さ四㎜

（表）

（裏）

大甕の付札　「二條六」は、二列目の六番目という意味。「瓾（みか）」は、酒の醸造や貯蔵に用いられた大型の甕を指します。造酒司の発掘調査では、内部に甕の据付け穴が整然と並ぶ建物が多く見つかっており、この木簡の記載とよく合います。三石五斗九升は、今の一石六斗二升ほど、約二九〇ℓに相当します。

長さ二三五㎜・幅四一㎜・厚さ六㎜

清酒の付札　清酒の容器に、整理用のラベルとして付けられた木簡。「中」は酒の等級を示すのでしょう。清酒は「スミサケ」または「スメルサケ」と読み、「濁酒（ニゴレルサケ）」に対する語。上澄みをすくう、または布でろ過するなどして、酒糟（さけかす）と分離したものと思われます。

長さ一五四㎜・幅（二二）㎜・厚さ四㎜